

過疎の嘆き 歌で表現

この道はだんだん狭くなる 町へ行くバスはもう来ない——。神奈川県南足柄市の農家が学生時代に作ったフォークソングに一流ミュージシャンが手を加え、今秋のCDデビューを目指している。タイトルは「過疎」。暗くなりがちなテーマをフォーカルグループ「BUZZ(バズ)」の東郷昌和さん(63)が軽やかに歌い上げた。「歌を通して過疎を考えるきっかけにしてほしい」と全国に向けて発信する。

(恩田哲也)



アレンジの打ち合わせで訪れた東郷さん㊨と雨宮さん㊨に、農園を案内する古屋さん(神奈川県南足柄市で)

「過疎」の歌詞

この道はだんだん狭くなる
町へ行くバスはもう来ない
ねんねの子守唄を歌ってくれた人も 今はもういないんだ

取り残された悲しさは 空の青さに似ているよ 青ぞうで 俺は一人じゃ 怖いんだ

帰ってきてくれよこの村に 今年もツバメがやってくる

何(なん)にも変わらないのに人の心だけが 町へ流れてくる

この道はだんだん狭くなる あの娘もあいつももういない

作ってほしい」と依頼され、ギターを手に取った。歌詞は、仲間が山間地で活動しているヒテオを基にイメージを膨らま

り、「愛と風のよう」でヒットを飛ばした東郷さん。松田聖子さんら多くの歌手のアルバム製作にも携わってきた。

現在、リマーク作業は大詰めを迎え、古屋さんの自宅で最終調整を済ま

れた。都市住民と共に市内の耕作放棄地の解消に取り組む古屋さんだが、「過疎は40年前から始まっているが、高齢化でどんどん加速している。この曲が過疎対策のキャンペーンソングになるように提案していただきたい」と意欲を見せる。

作詞・作曲は 神奈川の農家 プロがCD化

作詞・作曲したのは、同市で野菜や果樹を栽培する古屋富雄さん(62)。同市役所産業建設部の課長や同市農業委員会の事務局長を経て農家になつた。曲を作ったのは、日

本大学の学生だった40年ほど前。フォークギターが得意だったことから、熊本県の山間地酪農の研究をしていたサーケルの仲間から、「学園祭用に過疎の現実を伝える歌を

作ってほしい」と依頼され、ギターを手に取った。歌詞は、仲間が山間地で活動しているヒテオを基にイメージを膨らま

り、「愛と風のよう」でヒットを飛ばした東郷さん。松田聖子さんら多くの歌手のアルバム製作にも携わってきた。

せた。
高度経済成長の中で人々が都市へ出ていき、さびれてゆく農村の姿や、残された少年の寂しさをつづりながらも、背景には「再び村に戻ってきたい」との願いを

忍ばせた。

CD化に協力するの

は、1972年に自動車

常連客だったピアニスト・雨宮侃子さん(57)を通じて東郷さんに依頼し、CD化にこぎ着けた。古屋さん自作の歌を聴いた東郷さんは「ぜひやってみよう」と快諾。

東郷さんのつながりで、歌手・松任谷由美さんの

バックバンドを務めるギタリスト・平野融さん(61)も参加する予定となつた。

現在、リマーク作業は大詰めを迎え、古屋さん

の自宅で最終調整を済ま

った。アマチュアと連携する

のは初めてという東郷さんは「シンプルな歌詞だ

が、素直な気持ちが込められていて自分の感性に

ぴたりと合った。テンポの速い曲ばかりがはやっているが、若い人の心にも余韻を残す曲だと思

う」と評価する。

せ、9月までに発売する

めどが立った。

カップリング曲は、古屋さんが高校1年生のときに作った「遠い思い

出」を選んだ。幼いころ

さをつづりながらも、背

景には「再び村に戻って

きたい」との願いを

さづりながらも、背

景には「再び村に戻って

きたい」との願いを